

「茶の原産地としての雲南」

松下 智

(茶の文化振興会) 豊茗会会長、元愛知大学教授



巴達山の茶樹王



西双版纳の大葉樹

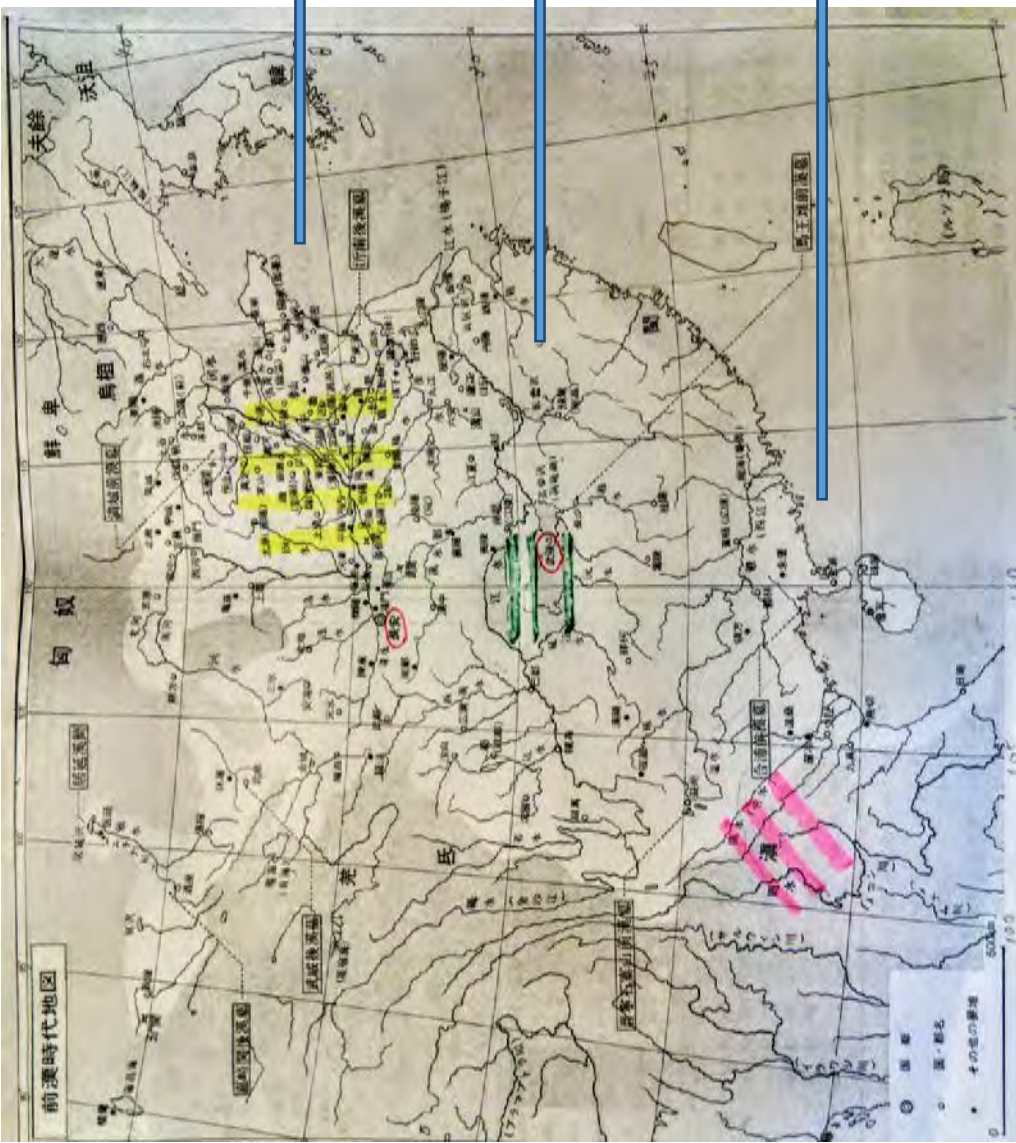


生葉を食すラオスのプライ族

漢族と茶

茶の原産地は、中国南方の雲南省南部ではないか、と云うのは早くから漢族の云うところである。漢族の活動してきたのは、中国大陸北部地方であり、茶の木が育つ環境条件ではない地方である。にもかかわらずそのように語り続けられているということは、漢族意識の表現であろう。茶の元祖とされている「神農」も、漢族の信ずる神であり、神農という農業の神であり、薬草の神でもあり、農具の神でもある。

茶の木を見ると、江南の中心地とみられる洞庭湖の西側山地「武陵山」まで、雲南地方から数千年余の年月で、たどり着いたのではないかと推測される。そして、この武陵山の山地に住む蛮族、そして瑶族によって、利用が始まり、現在まで広く伝えられてきたのではないかと考えられる。瑶族は、盤王を神として崇拝しているが、これは漢族の崇拝する神農と同時期に始まっている。茶の木が育つ武陵山から、北方の漢族の住居地まで、茶が送られてきたわけである。



漢族・漢文化と茶の関係

漢文化の地

武陵山・蛮族の地

茶の原産地

西双版纳の茶

西双版纳が、漢族、漢文化に認識されるのは、極言すれば第2次大戦の終わりからと云える。中国大陸から見れば、雲南省その地が、蛮族の住居地であって、漢族には口にも登らなかった地ではなかったか、と思える。その雲南の最南部が西双版纳であって、中国の国土とは云われるが、施政権はほとんど及ばず、専らタイ（傣）族の支配下にあった様である。12の地区に分けて統括して来たタイ（傣）族名が「シーサンパンナ」と呼ばれる、漢族の呼び名「西双版纳」である。

西双版纳の茶のことについて触れられるようになるのは、明確ではないが、中国の施政権が及ぶことになる宋、元、明の年代になってからではないか、と見る。

唐代の書とされる『蛮書』では、西双版纳の茶については、何も触れておらず、檳榔（ビンロー）について触れているのみである。「茶出銀生界諸山」とあることから、茶の木は実在していたようであるが、その利用については記されていない。南宋の『続博物誌』に至っても、同様の内容であるが、元代の『云南志略』には金齒百夷の市場で茶が取引されていたことが記されるようになる。

西双版纳の民族と茶

現在の西双版纳には、民族として認定されない少数民族を加えると20種ほどの民族が住むようであるが、こうした民族の中で、古くから茶に係る民族は全く無くて、多くが檳榔を嗜好していたのである。

もともと、西双版纳土着の民族は無く、チベット・ビルマ語族、モン・クメール語族、タイ語族、ミャオ・ヤオ語族等であって、それらは四方からの移住民族であるから、茶の木はあっても、それを利用することは知らなかったようである。

西双版纳の民族が、茶の木を利用するようになったのは、宋代、元代、さらに明代になって瑶族が西双版纳に移住するようになってからではないか、と考える。

西双版纳の茶といえば、勐腊県の北西に発達した「六茶山」と云われる古い茶産地があるが、現在では、茶産地としての面影は見られない。しかし、瑶族と同じ時代に開発されたとみられる「基诺山」だけは、基诺族によって現在も茶産地として発展している。

その他の5か所については、茶の木は有るが、茶産地としては見ることはできない。それは、瑶族による茶の開発があっても、瑶族の移住とともに消えたようであるからである。



勐腊県の六茶山の現況略図

照葉樹林と茶

中尾佐助氏、佐々木高明氏によって提唱された照葉樹林文化圏は、両氏の発現の様に、現在では、開発が進みその多くが農耕地となっているところが多い。

両氏の提唱した、照葉樹林はヒマラヤ山系から中国大陆、そして日本へと続いており、それに伴う文化も伝えられていて、日本文化としても、その底流には照葉樹林文化が伝えられていることは明らかである。しかし、その具体的な細部については、特に茶について見ると、補足の必要がある。

アッサム北部のヒマラヤ連山では、茶の木は明らかではないが、中国に入れば明らかに認めることができる。西双版纳の照葉樹林では、低地の標高800m以下の地には、茶の木は見られないが、それ以上1500m辺りの高地には認められる。

この傾向は、日本列島まで及んでおり、日本列島では、照葉樹林焼畑地域には、茶の木を認めることができるが、純然なる照葉樹林地帯には、茶の木は認められていない。宮崎県綾町の照葉樹林をはじめ、伊勢神宮の神域の照葉樹林、奈良公園の照葉樹林下にも茶の木は認められない。

照葉樹林と茶の木に関しては、深い関係にあるようではあるが、自然分布と人為分布の区別が困難であって、その原産地どころか、分布そのものについても、自然と人為の区別さえできかねる現況にあって、今後の調査、研究に待たねばならない。

松下 智 （まつした さとる）

豊茗会会長 元愛知大学教授

1953 年以來、茶の原産地究明のため、日本をはじめ中国、韓国、インド、ミャンマー、ラオス、ベトナム等を訪問、フィールド調査は現在も継続中。ティーロードの構築推進中。

「茶の民族資料館」設立準備中。

主な著書：『日本の茶 - その歴史と風俗 - 』風媒社、1969 年

『日本茶の伝来 - ティーロードを探る』淡交社、1978 年

『お茶の百科』同成社、1981 年

『茶の民族誌－製茶文化の源流』雄山閣出版、1998 年

『アッサム紅茶文化史』雄山閣出版、1999 年

『中国茶－その種類と特性』河原書店、2000 年

『緑茶の世界－日本茶と中国茶』岩田書院、2002 年

『日本茶の自然誌 －ヤマチャのルーツを探る』

愛知大学総合郷土研究所ブックレット 11, 2005 年

『茶の原産地を探る』大河書房、2012 年 その他多数

餓勝山のチャと



広東省排ヤオ族の竹茶筒



イ族の自家用釜炒り茶



ベトナムの生葉の茶